

神は像を用いた崇拜を是認されますか

(S-34_J_136、歌 63) (2023/7/29)

1. (崇拜に像を用いることは古くから広く行なわれてきた) (3分)

(14:35)

[画1]アーネのアクリルス見上げる広場でパウでごわいアーネ人の偶像崇拜に言及 [画9] (使徒17:22, 16) 苛立→多くの偶像現在では? [画2]像は今日でも多くの宗教で広く用いられ、世界はこの点でほとんど変わっていない [画9]
古くから広く行なわれてきた像を用いた崇拜を、エホバはどうご覧になるか? 像は崇拜に本当に必要か?

2. (像を用いる必要があるか) (3分)

(14:38)

物質の体を持つ人間は、自分が崇める物を見たり触れたりしたいと思い易い。現実感があるようでも現実ではない対し、永久に「生ける神」エホバは現実の存在で、どんな物質の創造物も比較にならないほど優れた方 (3つ)

- ①見たり触れたりして変形する多くの物とは対照的に神は、変化せず、時の経過による影響を受けない
- ②どんな像とも異なり、崇拜者たちからの世話を必要とされず、むしろご自分の崇拜者を世話をしてくれる
- ③(詩65:2)祈りを聞く方エホバは、無制限に祈りを聞き、ご自分の民の祈りに喜んで応えてくれる
真の神の崇拜に像が必要であるとは誰も言えない。しかし聖書は、このことにさらに重要な点があること示す

3. (エホバが像を用いた崇拜を禁じた理由) (9分)

(14:41)

エホバは、偶像崇拜が根づいていた異教諸国民と異なり、イスラエル国民に偶像崇拜を厳しく禁じた。重要な理由2つ

- ①目に見えないエホバの正確な像を作れず。(詩115:4-8)死んだ偶像で生ける神を表現するのは不可能
- ②(出34:14)エホバは全くの専心を要求される。唯一崇拜されるべき方で、このご要求は正当で尤もなこと妻の様な自分の民の偶像崇拜を靈的姦淫とみなされた(配偶者裏切重大な罪、売春/子供生贊等苦しみ伴う)
イスラエルとユダの歴史は、ほとんど偶像崇拜に影響を受けたものだった。王たちはどんな支配を行った?
 - ①ダビデの子ソロモンの治世の後期になってから、露骨な偶像崇拜が行なわれるようになり、ソロモンの多くの異国の妻達の影響により偶像崇拜が容認されアシュトレテやケモシュやモレクのために高き所が築かれました。
 - ②このように偶像崇拜が行なわれたため、エホバはソロモンの子レハベアムから十部族を引き離してヤラベアムにお与えになりましたが、ヤラベアムは王になるや子牛崇拜を開始し、この偶像崇拜は十部族王国の存在した全期間を通じて続きました。さらにアハブの治世中に(イゼベル)ティルスのバアル神崇拜が導入されました。
 - ③エヒウがバアル崇拜を根絶したこと以外に、十部族王国の君主が何らかの宗教上の改革を行なった記録なく、北王国の民や支配者は、繰り返し遣わされた預言者たちを軽視したため、全能者は彼らをアッシリア人の手に渡されました。
 - ④ユダ王国でも、一部の王たち(アサ、エホシャファト、ヒゼキヤ、ヨシヤなど)による改革があったものの、全体的な状況は決して良かった訳ではありません。偶像崇拜の直接の結果として王国が分裂したにもかかわらず、ソロモンの子レハベアムは偶像崇拜を退けようとせず、ユダのすべての民と共に背教し、高き所を築き、そこに聖柱や聖木を備え、儀式としての売春に携わりました。
 - ⑤ユダ王国の次の王アビヤムは父レハベアムの罪深い歩み方を広範に見倣いました。
 - ⑥次の王エホラムは、偶像崇拜にふける先の北王国のアハブ王の娘アタリヤを妻としたため、その治世は流血事件を伴って始まり、ユダの偶像崇拜をさらに発展させるものとなりました。
 - ⑦暗殺されたエホアシの跡を継いだアマジヤは、最初はエホバの目に正しいことを行ないましたが、エドム人を撃ち破つてエドム人の像を奪つてからその敵の神々に仕え始めたため、十部族王国に撃ち破られ、後に殺害されました。
 - ⑧ヨタムの子アハズはかつてユダで知られたことがないほどの規模で偶像崇拜を行ない始めました。アハズは自分の子らを火の中に犠牲としてささげたユダの最初の王でしたが、アハズは悔い改めるどころか、シリアの王たちの神々が彼らに勝利を得させたのだと結論し、それらの神々に犠牲をささげるようになりました。
 - ⑨ユダ最後の4人の王、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤは、かたくなに偶像崇拜を続けました。

イスラエルとユダの歴史は、偶像崇拜による暗黒の、災いの歴史でした。エホバが全くの専心を要求されたのも当然

4. では今日、崇拝の“助け”として像を用いることはどうだろうか (4分)

(14:50)

キリスト教世界の多くの人は像ではなく神を崇拝する助けとして像を用いる、自分は偶像を崇拝していないと、説明それでもその説明が偶像崇拝を正当化したり、許容できたりする訳ではない。

- ① 非ユダヤ人で最初にクリスチヤン会衆に招かれたローマ軍士官コルネリオが、訪問者^{ペテロ}にひざまずこうとした時に遮られたり、啓示の幻を与えられた使徒^{パウロ}も天使にひれ伏そうとし2回も戒められた—という事実ある
使徒や天使への崇拝行為が許されない、それより遙かに劣る偶像に対して許される訳が無い
- ② 真のクリスチヤンがどのように神を崇拝すべきか?という教えからもはつきり理解できる(ヨハ4:24) 正しい崇拝は、見えない聖なる力と聖書の真理に基づくべきなので、命のない物に力があること信じたり、神との執り成しをイエス以外に求める偶像崇拝は明らかにこの真理と相いれず、間違っていること分かる
真のクリスチヤンが崇拝の助けとしても像を用いるべきでないことは明らか

5. さらに、今日クリスチヤンは『偶像崇拝』に対してどんな態度を保つべきか、注意する必要無? (8分)

(14:54)

(ヨハ10:14) 使徒^{ペテロ}は偶像崇拝から逃げ去ってくださいと、逃走するよう強く勧めたが、今日どのように適用

この命令を初めて知ったなら、それに基づいて偶像を処分したり、完全に避けたりする必要がある

像/装飾品が全て偶像という訳ではないが、祝福や恵みを失う恐れのあるものは何でも取除く必要(申7:25-26)

クリスチヤンが引き続き偶像崇拝から逃げ去る必要があるのはなぜ? 地雷のように卑劣で見分けにくい/接触し酷い影響

(ヨハ3:5) ギ語: より多くを所有したい/貪欲でさえ偶像崇拝となる。名声/金銭/財産/権力/快楽/物/人の偶像視

[画3] 左/仕事を愛し集会休みがち、中/奉仕の約2倍の時間をゲームに費やす、右/月1度買い物を何よりも楽しみ

生活でエホバよりも高めている物は何でも偶像。王国の関心事を第一に偶像崇拝から逃がす[画9]

6. (生ける神を喜びをもって崇拝する) (3分)

(15:02)

信仰の狭い道歩んでいる私達には確かな祝福ある(ヨハ8:32) 偶像崇拝からの自由は清い崇拝の紛れもない祝福[画4]

偶像崇拝は像に利益を求めて利己主義を助長するが、清い崇拝は自分が与えること求め幸福もたらす。全く違う

私達は清い崇拝に集まつた信仰の家族と助け合いエホバが備えられた偶像のない時代に入っていく。本当に感謝

これからも偶像崇拝から逃げ去る努力を続け、生ける幸福な神エホバに永久に仕えることを喜びとしていく